

# 日本語の母音融合と母音交替

小野 浩 司

## Vowel Coalescence and Vowel Alternation in Japanese

Koji ONO

### 1. はじめに

日本語の母音にまつわる興味深い現象に母音融合と母音交替がある。前者は [sensei] (先生) → [sense(e)] に見るように、連続する二つの異なる母音が一つの母音に変化（これを融合と呼ぶ）することを言い、後者は [ame] + [kasa] → [amagasa] に見るように、別の語が後続することにより、語末の母音に変化（これを母音交替と呼ぶ）することを言う。言語事実としての母音融合と母音交替は決して目新しいものではないが、両者の関係についてはこれまで論じられたことがない。その関係を特定の視点でもって炙り出そうというのが本論のねらいである。具体的には、「聞こえ度」(Sonority Degree) という視点を用いて、両者の間には「対極」という関係が存在することを明らかにしてゆく。

### 2. 言語事実と先行研究

#### 2.1. 母音融合：窪園 (1999)

本節ではまず母音融合の実際例を余す所なく紹介し、その後で、これらの例の統一的な説明を試みた窪園 (1999) を概観し、検討する。ここでとくに窪園の論文を紹介する理由は、この論文が独自の手法（具体的には素性表示）を用いて母音融合の解明に大きく貢献したからである。

母音融合には次のようなものがある（窪園1999：98-99, 小野2001：885-886）。

#### (1)a. [ai] → [e(e)]

nagaiki (長息) → nageki (嘆き)    amai (甘い) → amee (あめえ)

[au] → [oo]

auta (会うた) → oota (おうた)    awaumi (淡海) → aumi (あうみ) → oomi (近江)

[eu] → [oo]

heu (へう) → hyoo (豹)    teu (てう) → tyoo (蝶)

[oi] → [ee]

sugoi (すごい) → sugee (すげえ)    hidoi (ひどい) → hidee (ひでえ)

## b. [ae] → [ee]

omae (お前) → omee (おめえ)    kaeru (帰る) → keeru (けえる)

[ao] → [o]

hataori (機織) → hattori (服部)

[ea] → [a(a)]

miteageru (見てあげる) → mitageru (見たげる)    orewa (俺は) → oraa (おらあ)

[eo] → [o(o)]

meoto (夫婦) → myooto (みょうと)    miteoku (見ておく) → mitoku (見とく)

[oe] → [ee]

sokoe (そこへ) → sokee (そけえ)    tokoroe (ところへ) → tokee (とけえ)

[ei] → [ee]

rei (礼) → ree (れえ)    kasei (加勢) → kasee (かせえ)

[ou] → [oo]

kouta (乞うた) → koota (こうた)    tou (問う) → too (とう)

[iu] → [uu]

iu (言う) → yuu (ゆう)    riu (りう) → ryuu (竜)

[ui] → [ii]

samui (寒い) → samii (さみい)    warui (悪い) → warii (わりい)

窪園 (1999) の最大の功績は、このように多様な母音融合の現象を音声素性 (Phonetic Features) を用いて一つにまとめ上げたことである。日本語の各母音は舌の高さと舌の前後の位置により、次のように素性表示される (窪園1999: 100–101)。

- (2) [i] : [+high, -low, -back]    [u] : [+high, -low, +back]    [e] : [-high, -low, -back]  
 [o] : [-high, -low, +back]    [a] : [-high, +low, -back]

窪園は(1)のすべての母音連続を素性表示に書き換えることによって、母音融合に関する重要な発見をした。その発見とは、母音融合の出力形は常に最初の母音の[high]と2番目の母音の[low], [back]が組み合わさって出来上がる、というものである。たとえば、[ai], [ou], [ui]は(3)に示すような基底の音声素性表示から、それぞれ最初の母音の[high]と2番目の母音の[low, back]をつなぎ合わせて[ee], [oo], [ii]を作り上げる。

- (3) [ai] → [ee] : [-high, +low, -back] [-high, -low, -back] → [-high, -low, -back]  
 [ou] → [oo] : [-high, -low, +back] [+high, -low, +back] → [-high, -low, +back]  
 [ui] → [ii] : [+high, -low, +back] [+high, -low, -back] → [+high, -low, -back]

窪園 (1999) では、最終的に次のような一般性の高い規則の提示がなされた (窪園1999: 103)。

- (4) [α high, δ low, ε back] [ζ high, β low, γ back] → [α high, β low, γ back]

## 2.2. 窪園 (1999) の問題点

(4)は確かに一般性の高い規則であり(1)の母音融合の例を余す所なく説明するのであるが、問題がないわけではない。以下においてその代表的な問題点を三つ指摘する。

最初に、そしてこれが最も重要な問題点であるが、(4)の規則は母音融合を過剰に生成してしまうという欠点をもつ。(4)には入力となる母音の種類に関する条件が何ら組み込まれていないため、原理上どのような母音の組み合わせも許してしまう。具体的には(5)に示すような実際には存在しない母音の組み合わせをも許してしまい、結果として非文法的な融合形を生成してしまうのである。

- (5) a. [ie] : [+high, -low, -back] + [-high, -low, -back] → \* [+high, -low, -back] = [i]  
 b. [io] : [+high, -low, -back] + [-high, -low, +back] → \* [+high, -low, +back] = [u]  
 c. [ue] : [+high, -low, +back] + [-high, -low, -back] → \* [+high, -low, -back] = [i]  
 d. [uo] : [+high, -low, +back] + [-high, -low, +back] → \* [+high, -low, +back] = [u]  
 e. [oa] : [-high, -low, +back] + [-high, +low, -back] → \* [-high, +low, -back] = [a]

次の問題は、融合の結果生じた形に関するものである。確かに規則(4)を用いれば多様で複雑な母音融合という現象を一つにまとめることは可能かもしれない。しかし、結果として出て来る形(融合形)には二通りあることを忘れてはいけない。一つは融合形が入力のいずれの母音とも異なる場合であり、もう一つは融合形が入力のいずれか一方の母音と同じ場合である。前者の例は(1a)に、後者の例は(1b)にそれぞれ列挙している。本論では(1)においてこれら2種類の母音融合を区別したが、窪園(1999)はこのような区別をしていない。もちろん、こういった区別が言語学的に意義のないものであるならばわざわざそうする必要はないが、次節において論述するように、この区別は母音融合を解明する上で重要な鍵となる。いずれにしても、なぜ融合形が2種類の現れ方をするのかは問う価値のある疑問であり、窪園(1999)がこの点の考察を怠ったことは問題である。

最後に挙げるのは、窪園(1999)の分析に対する最も素朴な疑問であり、素朴であるがゆえに、答えるのが難しい疑問である。その疑問とはつまり、二つの母音が融合する場合、本来素性の組み合わせは全部で6通り((4)の他に[α high][δ low][γ back], [α high][β low][ε back]他3通り)あるはずなのに、なぜ第1母音の[high]と第2母音の[low, back]の組み合わせだけが許されるのか、というものである。原理的には、第2母音の[high]と第1母音の[low, back]が組み合わせさってもおかしくないはずである。窪園自身はこの件に関して、他の言語の研究が進まないと解決できないと述べているが(窪園1999:104)、しかし、予想されることは、たとえ他の言語の研究が進んだとしても、上記の問いに対する満足の行く答えの提示は期待できないということである。なぜなら、窪園の枠組みを採用するかぎり、恐らく、ある種のパラメータのようなものを設定したうえで、各言語の素性の組み合わせを決定すると予想されるからである。ただし、ここで取り上げている問題は、窪園(1999)の分析を採用する限りにおいて生じる可能性があるという条件付きである。したがって、他の分析法を用いれば、ここでの問題は生じない可能性があり、実際、本論ではそのような分析法の探究を行う。

## 2.3. 聞こえ度分析

以下では、小野(2001)同様、音韻素性を用いない母音融合の解明、すなわち「聞こえ度」(Sonority Hierarchy)に基づく母音融合の解明を行ない、窪園(1999)に対する代案としたい。ここで聞こえ度を用いる理由は、上で挙げた三つの問題点を回避できるばかりでなく、母音融合と次節で議論する母音交替との

関係も明らかになると考えるからである。

議論の対象となるのは日本語の母音の融合であるので、ここでは子音の聞こえ度は考慮しない。日本語には五つの母音があり、それらの相対的な聞こえ度は次に示すとおりである。

(6) [a] > [o, e] > [u, i]

さて、上で指摘した窪園(1999)の第1の問題点は、母音融合の過剰生成ということであった。ここでもう一度過剰に生成される融合の例を見てみよう。

(7) [ie] > \* [i]    [io] > \* [u]    [ue] > \* [i]    [uo] > \* [u]    [oa] > \* [a]

今、(6)の聞こえ度の観点から(7)を見直すと、ある共通の特徴が浮かび上がってくる。その特徴とは、(7)において入力第2母音のほうが第1母音より聞こえ度が高いというものである。言い換えれば、(7)の入力はすべて聞こえ度に関して上昇しているのである。この点は(1)の各例([ea]を除いて)の聞こえ度が下降していることと好対照をなす。以上の観察から、(7)において母音融合が許されないのは「聞こえ度の上昇」に原因があると考えて間違いなく、これを本論では母音融合の必須の条件として提示する。

(8) 母音融合において聞こえ度は上昇してはならない。

では、なぜ母音融合において聞こえ度は上昇してはならないのだろうか。この問いに答えるために、本論ではまず聞こえ度を「母音が固有にもつ力」と規定する。ここで言う「力」は、強い力と弱い力に二分でき、聞こえ度が高ければ力は強く、反対に、聞こえ度が低ければ力は弱いと規定する。力の最も強い母音(すなわち聞こえ度が最も高い母音=[a])は音韻変化を受けにくく、母音本来の性質を保つ傾向にあると考える。他方、力の最も弱い母音(すなわち聞こえ度の最も低い母音=[u, i])は音韻変化を受けやすく、ある場合には削除されたり、またある場合には添加されたりする。

母音には固有の力があるということは根拠のないことではなく、それを裏付ける幾つかの証拠が存在する。ただし、現時点において[a]と[e, o]を区別する証拠が見つからないため(その理由は恐らく両者が同じ範疇に属するためと思われる)、正確には、力の最も弱い[i, u]とそれ以外の母音を区別する証拠が幾つか存在すると言ったほうがよいであろう。これはつまり、[i, u]には観察されるが、それ以外の母音には観察されない幾つかの現象があるという意味である。仮に、「力」という概念が日本語の素性表示の中にあるとするなら、[+force]に属する母音は[a, e, o]であり、[-force]に属する母音は[i, u]ということになるだろう。

[i, u]が他の母音より力が弱いことを示す例として母音挿入がある。漢語や外来語が日本に入った際、原語にはないが、日本語には必要な母音(これを挿入母音と言う)として最も多く用いられるのが[i]と[u]である。2モーラからなる漢語が母音で終わっている場合、その母音は[i]または[u]であることが多いが([eki] < 「駅, 液, 益…」, [seki] < 「席, 積, 籍…」, [kaku] < 「各, 核, 角…」, [satu] < 「冊, 札, 察…」, [ritu] < 「率, 律, 立…」), これらの母音は言うまでもなく、日本人が後から挿入した母音であり、原語(中国語)には存在しない母音である。同様のことは漢語以外の外来語についても言える。原語が子音で終わっている場合、あるいは、原語に子音連続が含まれている場合、日本語ではそこに[u]または[i]という挿入母音が見れる(ただし、[t]の後には特殊な理由により[o]が挿入される)(swim > [suimu], book >

[bukku], case > [keesu], beach > [biiti], cake > [keeki], strike > [sutoraiki]) (田端(1996), Kubozono(2001)参照)。なぜ挿入母音として[i]と[u]が選択されるのか、その理由は、恐らくこれらの母音が「母音」として最も個性のない母音、あるいは本論の言葉で言えば、力のない母音だからであろう。挿入される母音は、日本語の構造上(すなわち、日本語の音節は基本型にCVでなければならないという制約)を守るために挿入された母音であり、言ってみれば、やむを得ない事情で無理やり挿入された母音なのである。そのような母音は自らの個性を主張するような母音であってはならず、あくまでも他の母音と競合しない、目立たない存在でなければならないはずである。上記の例において力の弱い[i]と[u]が選択されたのはこのような事情があったからだと思われる。

力の弱い母音が係わる第2の現象にイ音便(kaki + ta → kaita)とウ音便(arigataku → arigatau (→ arigatou))がある。イ音便、ウ音便ともに、当該の母音のすぐ前の子音を削除する点で類似しているが、ここではそれよりも、力の最も弱い[i]と[u]がこれらの音便に直接係わっていることのほうがむしろ興味を引く。音便発生の原因については諸説さまざまであるが、語末に[i, u]をもつ音節は、その母音の力の弱さゆえに音節を保つことが出来ず、頭子音を削除し、先行する音節の一部になったと解釈することもできる(Ono(2004)参照)。

[i, u]の力が弱いことを示す第3の証拠に、日本語のアクセント移動がある。周知のように、共通語の「キ、ク、シ、ス、チ、ツ、ヒ、フ、ピ、プ」に含まれる母音は無声化しやすく、本来そこに置かれるはずのアクセントが、前後に移動することがある。たとえば、女性の名前に付く「子」は「た'かこ」や「か'ずこ」に見るように、通常頭高アクセントを要求するが('はそこでピッチが下がることを意味する)、「ひさ'こ」や「ふさ'こ」の場合だと、「ひ」や「ふ」の母音が無声化するためにアクセントが右方向へ移動する(秋永1998: 137, 219)。言うまでも無く、ここで無声化する母音は[hisako]の[i]と[husako]の[u]である。これら二つの母音がなぜ無声化するのかについては、ここでもまた、[i]と[u]が他の母音よりも「力」が弱く、したがって、アクセントを保持する力もまた他の母音に比べて弱いと考えることができる。

以上の考察から、高母音[i, u]が音変化を受けやすいのは、その母音としての「力」が弱いためであるという帰結が導かれる。しかし、言うまでも無く、ここでの帰結は高母音[i, u]とその他の母音[a, o, e]の間に「力」の境界線を引いただけであって、[a]と[e, o]の力関係について何も触れていない。その最大の理由は、すでに述べたように、日本語において両者を明確に区別すべき言語学的証拠が見つからないからである。今後、このような証拠が実際に存在するののかも含めて、両者の間の力関係をより詳細に検討する必要がある。

さて以上の議論を踏まえて、ここでもう一度本題(「なぜ母音融合において聞こえ度が上昇してはいけないか(=8)」)に戻ろう。これまでの議論は、まさにこの問いに答えるためのものであった。本論では「母音の力」という概念を新たに音韻理論に加えたのであり、この観点から母音融合を説明することが本論のねらいである。すなわち、連続する二つの母音において、後の母音の力が弱ければ、力の山は一つだけ形成されることになり、結果としてあたかも一つの母音のように知覚され、融合しやすくなる。他方、後の母音の力が強ければ、連続する母音の山は二つになり、まとまりをもった一つの母音とは知覚されにくく、それゆえ融合もされにくいということになる。力において「強弱」の母音が一つにまとまりやすいというのは、[ai, ei, oi]などが2重母音の典型として考えられていることと無縁ではない。これら2重母音は「弱強」の[ia, oa, ua]などに比べるとはるかにまとまりのある連続母音であり、同一音節を構成する母音連続と言えるのである(窪園1999: 149)。

## 2.2. 母音交替

ここで言う母音交替とは次のような交替をさす (Kusters (2004) 参照)。

- (9) a. [o] → [a] siro → sira-hama  
 b. [e] → [a] ame → ama-yadori  
 c. [e] → [o] se → so-muku  
 d. [u] → [a] yasu → yasa-sii  
 e. [u] → [o] maru → maro-yaka  
 f. [i] → [a] hasi → hasa-mu  
 g. [i] → [o] ki → ko-morebi  
 h. [i] → [u] kuti → kutu-wa

母音交替にはこの他にも、他動詞と自動詞を交替させた時に起こる母音交替もある (窪園1999:110)。

(10)では他動詞の語幹末の[e]が自動詞において[a]に変化したことを示す。

- (10) [e] → [a] ageru – agaru seru – saru hirogeru – hirogaru

以下では、このような母音交替の解明に貢献した Kusters (2004) を概観し、その後で母音融合との関連性を論じる。Kusters (2004) は、(9)に示した複雑な母音交替の現象に対して、最適理論 (Optimal Theory) を援用し、明示的な形での一貫した説明法の確立を目指した。しかし、それ以上に注目すべきは、Kusters が「聞こえ度」を母音交替の重要な要因と見なした点である。議論の詳細は Kusters (2004) に譲るとして、ここでは Kusters が提示した制約群とそのランキングを紹介する (Kusters2004:30)。

(11)

input / kuti + wa/	Harmony	SonCon	MinDis	Ident-IO
a. kuti-wa	* !	*	*	
b. kuto-wa	* !			*
→ c. kutu-wa			*	*

(11)において聞こえ度に関係する制約は SonCon (Sonority Constraint) と MinDis (Minimal Distance) である。前者は、母音交替をする際出力となる母音の聞こえ度を上げなければならないという制約である。具体的には、(11a) のように、入力[t*i*]の[i]がそのままの形で出力として現れた場合に、これを違反と見なすという制約である。MinDis は、入力の母音と出力の母音の聞こえ度は違うレベルに属さなければならないという制約である。Kusters 自身は[e]よりも[o]のほうが、また、[i]より[u]のほうが聞こえ度は高いと見なしているが、全体としては他の学者同様、[a] > [o, e] > [u, i] のように仮定している。したがって、[o] と [e], [u] と [i] はそれぞれ同じレベルに属することになる (Kusters2004:28)。レベルが異なるのは、[a] と [o, e], [u, i], それに[o, e] と [u, i] である。(11a, c) が MinDis に違反しているのは、入力[t*i*]の[i]が出力においてレベルの異なる[o]に交替しなかったからである。

今述べた二つの制約以外に(11)には Harmony と Ident-IO という制約がある。Harmony は、フット内 (この場合[kuti]がフットを形成する) の母音をすべて同じにする制約であり、(11a), (11b) はともにこの制

約に違反している。一方, Ident-IO は入力と出力の母音を同じにする制約であり, (11b) と (11c) がこれに抵触する。

Kusters (2004) の功績は, (11)に挙げた制約とその制約のランキングを取り決めることによって, 一見捉らえどころのない母音交替の全容を明らかにしようとした点にある。しかし, このような試みに問題がないわけではなく, 以下ではそのうちの二つだけを指摘する。最初は, 制約群の最上位に位置付けられた Harmony に関する問題である。この制約は, 今述べたように, フット内の二つの母音を同じものにせよという制約であるが, しかし, この制約が厳し過ぎることは[sira-hama] (< siro-hama), [maro-yaka] (< maru-yaka) などから明らかである。仮にこれらの例が Harmony に従わなければならないとしたら, それぞれの語は\*[siri-hama]や\*[mara-yaka]などになっていなければならない。ただし, この点は Kusters 自身も気づいていることであり, Kusters はこの問題に対して, 母音交替には Harmony を最上位にランク付ける母音交替と, より下位にランク付ける母音交替があり, これらは明確に区別しなければならない (あるいは語彙指定 (lexically specified) しなければならない) といった提案を行っている (Kusters2004: 31)。しかし, 言うまでもなく, このような提案は問題の根本的解決にならない。なぜなら, どうして[sira-hama]や[maro-yaka]に対しては Harmony が下位に位置付けられ, (9)の他の例 (たとえば[ama-yadori], [yasa-sii]など) ではこの制約が上位に位置付けられるのか, その点が依然として不明のままだからである。

Kusters (2004) の第2の問題は, 本論の主題とも密接に関係のある, SonCon に関するものである。この制約は, 「交替する母音の聞こえ度は下げない」, あるいは逆に, 「交替する母音の聞こえ度は上げなければならない」という主旨の制約であり, 母音交替の事実を的確に記述するには役立つ。しかし, なぜ聞こえ度を下げてはならないのかというより根源的な問題は未解決のままである。ただし, 一言付け加えるならば, この問題が未解決なのは Kusters 自身に責任があるというよりも, むしろ責任は Kusters が援用している最適理論のほうにあると言ったほうが正確であろう。というのも, 最適理論の主たる目的は, 現象解明のための幾つかの制約を見つけ出し, かつ, その制約間のランキングを設定することだからである。つまり, 最適理論においては, 制約の提示こそが最重要課題であり, 当該の制約が言語学的にどのような意義・意味をもつかはあまり探求の対象にはなっていないのである。

以下では, 最適理論に頼ることなく, 根源的な疑問である, なぜ母音交替において聞こえ度は上昇しなければならないのか, について原因を究明する。まず考えられることは, 母音交替は母音調和の一つの具現化した形であるという解釈である。[ame] (雨) が[ama]に, [kane] (金) が[kana]に, [kuti] (口) が[kutu]に, そして[yasu] (易す) が[yasa]になるのは, 交代する母音がすぐ前の母音と同じ音形をもつことが求められたから, と説明することができる。単語や句の中の母音を同一にする (あるいは調和させる) という現象は日本語に限らず多くの言語においても観察されることであり, 母音交替はこのような母音調和の一種であるとも考えることもできる。実際 Kusters (2004) においてもこの点は配慮され, 制約 Harmony が最上位に置かれたのであった ((11)を参照)。しかし, 上でも述べたように, 母音調和という観点からの母音交替の説明には問題があるし ([sira-hama], [maro-yaka]は母音調和を起こしていない), なによりも, このような解釈を採用するなら, 調和を引き起こす母音([ame]の[a]など)の聞こえ度が調和の対象となる母音([ame]の[e])の聞こえ度より高いのは偶然に過ぎなかったということになってしまい, 結果として, 母音交替において聞こえ度が上昇するのも偶然の産物であったということになってしまう。というのも, 「調和」ということに関して言えば, 原理上はそれを引き起こす母音が対象となる母音より聞こえ度が低くても問題はないはずであり, そうなると母音の聞こえ度も下降してよいはずだからである。しかし, 事実はそうならず, 交替する母音の聞こえ度は一様に上昇している。このように, 母音調和という観点からだけで, 「交替する母音の聞こえ度は上昇しなければならない」という条件を導き出すことには無理がある

と思われる。しかし、そうは言っても、[yasu] → [yasa]を見ればわかるように、ただ単に[u]の聞こえ度を上げるためだけなら、[o]や[e]に交替してもよいわけであるが、[u]が2段階上の[a]に交替した理由はやはり母音調和と考えるのが妥当であろう。以上のことから、本論では、母音調和は聞こえ度を上げる一つの要因ではあるが、これだけで聞こえ度の上昇がすべて解明できたわけではないという立場をとる。

さて、以下では、前節同様、母音の「力」という観点から、ここで問題にしている「聞こえ度上昇」の説明を試みる。前節の議論を振り返ると、聞こえ度が上がるということは、母音のもつ力が増すということであった。したがって、母音交替において聞こえ度が上がるということは、交替する母音の力が増すということにはほかならない。では、更に一步踏み込んで、なぜ交替する母音の力を増さなければならないかということ、それにより交替が起きる語の役割を単なる修飾語としての役割ではなく、その役割にさらに別の意味上の役割を加えた機能を持たせるため、と考えることができる。ここで言う「別の役割」にはさまざまあって一言で定義することは難しいが、たとえば当該の語と他の語の対比を際立たせる役割や、当該の語に親しみを感じさせるような役割などがそれに該当する。幾つか具体的な例を見てみよう。空から降ってくるものと言えば、その代表は「雨」であり、それ以外のものをすぐに思い浮かべるのは（冬の雪国の人を除けば）少し時間がかかるのではないだろうか。つまり、雨は空から降ってくるものに関して、何かと対比するようなものではないのである。このように対比の意味をもたない「雨」に名詞「降り」が付いたとしても、母音交替は起こらず、そのまま[ame-huri]となる（もし「雪降り」が「雨降り」同様、日常的なことであつたら[ame-huri]と発音していたかどうかはわからない）。一方、「戸」にはいろいろの種類があり、用途の違う別の戸と対比させる必要性から、とくに雨を防ぐための戸という意味で[ama-do]（雨戸）が出来上がったと推察できる。同様の理由で、[kuro-kami]（黒髪）との対比で[sira-ga]（白髪）、「下着」との対比で[uwa-gi]（上着）という言い方が生まれたと考えることができる。もちろん、ここで用いている「対比」という概念が母音交替の絶対的基準でないことは言うまでもない。たとえば、「目薬」は他の薬との対比で\*[magusuri] (cf. [mabuta] (目蓋)) となってもおかしくないのに、そうならないのはなぜかという問題はあつた。このような例は他にたくさん見つけることができるであろう。しかし、それにもかかわらず、少なからぬ例において、「対比」という特殊な意味が母音交替に付随して生じることも事実であるから、本論ではこれまでの主張どおり、聞こえ度の上昇は母音の力を増し、そのことが原因で「対比」という新たな意味が加わると考える。

前節では母音融合に関して、聞こえ度の下降は音としてのまとまりを保つために必要な条件であつたと論じた。これは純粹に音韻的側面からの母音融合の解釈であるが、ここで議論している母音交替の解釈は、音韻的側面（すなわち「母音の力が増す」ということ）が意味的側面（すなわち「母音交替する語には何らかの意味が加わる」ということ）にまで拡張しようという点で、注目に値するであろう。端的に言えば、音が意味に影響を及ぼすということを本論では主張しているわけであるが、しかし、このようなことは決して珍しいことではなく、日本語の擬態語・擬声語など、いわゆるオノマトペの研究においてはしばしば言及される事柄と言える。ちなみに、オノマトペを題材に、聞こえ度が増す（すなわち高母音が低母音化する）という事態を解釈すれば、「緊張」や「鋭さ」という意味合いが取れて、「柔らかさ」や「優しさ」という意味合いが出てくるということになる（高母音が「緊張、鋭さ」を表すことは([kiri-kiri], [pusu-pusu])などを見ればわかるし、また、低母音が「優しさ」や「柔らかさ」を表すことは[sara-sara], [soyo-soyo]などを見ればわかる）（詳しくは Hamano (1998) 参照）。たとえば、[hi] (火) の高母音[i]が低母音化し、[o]になると[hotaru] (火垂) になることに代表されるように、螢の光のもつ優しさ・柔らかさが意味の中に加えられる。同様のことはオノマトペ以外の[ki-kage] → [ko-kage] (木陰) にも言えるであろう。また、高母音[u]を中高母音[o]に変えることによって、たとえば[maru-yaka]が[maro-yaka] (まるやか) になり、文字通



り「まるやかさ」が語の意味に醸し出される。同じことは、中高母音[e]を低母音[a]にした ([tume-biki] → [tuma-biki](爪弾き) の場合) にも言える。

### 3. まとめ

本論では日本語の母音に関する二つの現象、すなわち、母音融合と母音交替について論じてきた。議論の対象となった母音は、前者においては連続する二つの母音であるのに対して、後者においては語末母音一つである。また、それらの現象に係わる領域は、前者においては単独の語、あるいは複合語であるのに対して、後者においては複合語のみとなっている。このように一見共通項がなさそうな二つの現象であるので、従来別個の現象と見なされ、別々に議論されてきた。本論ではこのような状況に対し、「聞こえ度」という視点を持ち出すことによって、これまで見えてこなかった両者の関係を浮き彫りにした。

母音融合は聞こえ度を上げてはいけない現象であり、母音交替は逆に聞こえ度を上げなければならない現象である。つまり、両者の関係は聞こえ度を軸とした対極の関係にあるのである。本論ではこの関係を偶然的産物と見なさず、そこになんらかの必然性を見出すことに努めた。その際の鍵となる概念が「母音の力」というものであった。この力は聞こえ度によって決まり、聞こえ度が高いほど母音のもつ力は弱く、聞こえ度が低いほど母音のもつ力強くなる。母音融合においては、連続する母音の第2母音の力が弱いことが要求され、母音交替においては、交替の対象となる母音の力が強いことが要求される。言い換えれば、前者では、聞こえ度を下げ、後者では、聞こえ度を上げる、という対極の関係が成り立っているのである。

### 参考文献

- 秋永一枝 (1998) 「共通語のアクセント」『NHK 日本語発音アクセント辞典』, NHK 出版.
- Hamano, Shoko (1988) *The Sound-Symbolic System of Japanese*, Kuroosio, Tokyo.
- 窪園晴夫 (1999) 『日本語の音声』, 岩波書店.
- Kubozono, Haruo (2001) “Epenthetic Vowels and Accent in Japanese: Facts and Paradoxes,” *Issues in Japanese Phonology and Morphology*, ed. by Jeroen van de Weijer and Tetsuo Nisihara, Mouton de Gruyter, Berlin, 111–140.
- Kusters, Harold (2004) “Vowel Alternation in Modern Japanese and Sonority,” 『音韻研究7』, 日本音韻論学会編, 25–32.
- 小野浩司 (2001) 「日本語の母音融合について」『意味とインターフェイス下巻』中右実教授記念論文集, くろしお出版, 885–896.
- Ono, Koji (2004) “On Deriving Three Types of Onbin Changes in Japanese Verbs,” *Tsukuba English Studies* Vol. 22, 343–357.
- 田端敏幸 (1996) 「外来語に関する音韻制約について」『音韻研究』音韻論研究会編, 133–136.